

平成 26 年 2 月 1 日

京口門だより NO. 4

はや寒中もすぎ 2 月 4 日は立春です。これまでの寒さが少しずつしりぞき、春の陽気が顔をのぞかせてきます。先日もある患者さんが、春の暖かさが出てくると体調が何となく悪くなります。とおっしゃっていました。確かにそのような感覚にとらわれます。漢方の古典には、「春三月は発陳という」とあります。発陳とは冬のあいだに収めておいたものを、春になって袋の口を開いて丘の上に並べるという意味だそうです。

木の芽も芽吹く頃です。花粉も飛び出してくる季節です。1 月末から 2 月にかけて早い人は花粉症に悩まされはじめます。最近では花粉だけでなく、PM 2.5 にも悩まされます。花粉も PM 2.5 もアレルギー反応を起こす抗原(アレルゲン)です。アレルギー反応は、体外あるいは体内の抗原物質が体内にできた抗体というものと反応して起こってきます。いつも自分の中にある物質には反応しませんが、外から入ってくる物質や体内にできた異常な物質を排除しようという働きです。本来、有害物質を取り除こうとする我々の身体の働きなのですが、過剰に反応して身体の粘膜や皮膚にアレルギー反応を起こしてしまいます。それが花粉症であり、アレルギー性鼻炎、喘息、アトピー性皮膚炎などです。花粉症というのはある限られた時期、季節の変わり目のような時に生じる鼻炎のことです。アレルギー性鼻炎というのは年中おきている鼻炎のことです。

花粉症の治療の一つはアレルゲンとなる物質から逃れるように防御をするというものです。しかしマスクをしようが、メガネをかけようが、なかなか防ぎきれぬものではありません。したがって、もう一つの治療は強力にアレルギー反応を薬によって押えこもうとします。これも人によっては嫌な副作用が現われやすいこともあります。

漢方ではどうかといいますと、何種類かの花粉症の薬があります。ミズバナ、クシャミ、涙など分泌物が過剰なタイプと、クシャミ、ミズバナよりも鼻づまりや頭痛、肩凝りのタイプに大きく分れ、それぞれに適した漢方薬があります。これらの薬は無理やりアレルギー反応を押えこもうとするより、アレルギーの起こっている状態を自分から和らげるような作用をすると思われれます。

何かよく分からないがそれで効くのかと言われそうですが、実際に使ってみますと案外早く症状が治まってきます。現代医薬の抗アレルギー剤で困っている方は、是非漢方薬を試みていただきたいと思います。アレルギー性結膜炎にも良い漢方薬があります。また喘息には多彩な漢方薬があり、こじれない前に早めに漢方治療をされることをお勧めします。

